

# 日蓮大聖人御書全集

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう

三世諸仏總勘文教相廢立

そうかんもんしよう

(總勘文抄)

# 三世諸仏總勘文教相廢立（總勘文抄）

こうあん  
にちれん

弘安 2年 (79)

10月

58歳

ねん  
せん

がつ

さい

日蓮これを撰す。

そ いちだいしょうぎょう

夫れ、一代聖教とは、

そう ごじゅうねん せつきよう  
総じて五十年の説教なり。これ

を一切経とは言うなり。これを分かちて一つとなす。一に

は化他、二には自行なり。

そ いつきいきょう  
けた い  
に じぎょう

ほけきよう

さき

しじゅうにねん

あいだと

い

一に化他の経とは、法華經より前の四十二年の間説き

たま もろもろ きょうぎょう

さきよう

い

給える諸の経教なり。これをば權教と云い、または

ほうべん な しきよう なか さんぞうきよう つうきよう べつきよう

方便と名づく。これは四教の中には、三藏教・通教・別教

さんきょう

ごじ

なか

けごん

あごん

ほうどう

はんにや

の三教なり。五時の中には、華厳・阿含・方等・般若なり。

ほつけ

さき

しじきようぎよう

じつかい

なか

法華より前の四時の経教なり。また、十界の中には、前の

くほうかい

九法界なり。

また、夢と寤との中には、夢の中の善悪なり。また、夢

ゆめ

なか

なか

ゆめ

なか

ぜんあく

ゆえ

ゆめ

けう

ゆめ

をば權と云い、寤をば実と云うなり。この故は、夢は仮有

ごん  
いたい

うつつ  
じつ  
い

ゆえ

な

ごん  
いたい

ゆえ

ゆえ

うつつ

じつ  
う

にして体・性無きが故に、名づけて權と云うなり。寤は

ゆえ

ふへん  
こころ  
いたい

ゆえ  
ゆえ  
な

ゆえ

ごん  
いたい

ゆえ

な

じつ  
う

じつ  
う

常住にして不変の心の体なるが故に、これを名づけて實

ゆえ

しじゅうにねん  
もろもろ  
きようぎよう

ゆえ  
ゆえ  
な

ゆえ

ゆえ

な

じつ  
う

じつ  
う

となす。故に、四十二年の諸の経教は、生死の夢の中の

ぜんあく

じ  
と

ゆえ

ごんきょう  
い

ゆえ

ゆえ

しゅじょ

ゆういん

ゆういん

善惡の事を説くが故に、權教と云う。夢中の衆生を誘引し

きょうがく ほけきょう うつつ じょう  
おぼ したく ほうべん  
きょうぎょう ゆえ ごんきょう い  
の 経 教 なるが故に、 権 教 と 言 う。

もんじ よ ただ  
こころう ゆえ ごん  
これによつて、 文字 の 読み を 紛 して 心得 べき なり。 故に 権  
かり よ ごん  
じつ まこと よ  
てほん ゆめ  
をば 権 と 読む。 権 なる 事 の 手本 には、 夢 を もつて 本 となす。

じつ まこと よ  
じつじ てほん うつつ  
また 実 をば 実 と 読む。 実事 の 手本 は、 夢 なり。 故に、 生死 の  
じ てほん  
ごん  
じ  
てほん  
ゆえ  
しょうじ  
ほん  
ゆえ  
か  
こころ  
ゆめ  
もうぞう  
い  
ほんがく  
うつつ  
じつ  
しょうめつ  
はな  
じつそう  
い  
夢 は 権 にして 性・体 無ければ、 権 なる 事 の 手本 なり。 故に

じんじつ てほん  
ゆえ  
じ  
い  
じ  
こころ  
ごんじつ  
さべつ  
妄想 と 云う。 本覚 の 痞 は 実 にして 生滅 を 離れたる 心 なれ  
ば、 真実 の 手本 なり。 故に 実相 と 云う。 ここ を もつて 権実 の

に  
じ  
ただ  
いちだいしょうぎょう  
けた  
ごん  
じぎょう  
じつ  
さべつ  
二字 を 紛 して、 一代聖教 の 化他 の 権 と 自行 の 実 との 差別

し ゆえ しきよう なか さき さんきよう ご じ  
を知るべきなり。故に、四教の中には前の三教と、五時の  
なか さき し じ じっぽうかい なか さき くほうかい おな  
中には前の四時と、十法界の中には前の九法界は、同じく皆  
ゆめ なか ぜんあく じ と  
夢の中の善惡の事を説くなり。故に、權教と云う。  
きょうそう  
この教相をば、無量義經に「四十余年、未顯真実」と説  
いじょう  
きたもう已上。

みけんしんじつ しょきょう むちゅう ざんきよう  
未顯真実の諸經は夢中の權教なり。故に、釈籤に云わ  
しよう こと  
く「性は殊なることなしといえども、必ず幻に藉つて、幻  
き げん かん げん おう げん ふ  
の機と幻の感と幻の応と幻の赴とを發す。能應と所化は、  
ならびに權實にあらず」已上。これ皆、夢幻の中の方便の教  
いじょう  
みな むげん なか ほうべん  
おし

えなり。「性は殊なることなしといえども」等とは、夢見る  
心性と寤の時の心性とはただ一つの心性にして、すべて  
異なることなしといえども、夢の中の虚事と寤の時の  
実事と、一事一つの心法なるをもつて、見ると思うも我が  
心なりと云う釈なり。故に、止觀に云わく「前の三教の  
四弘、能も所も泯ぶ」已上。「四弘」とは、衆生の無辺な  
るを度せんと誓願し、煩惱の無辺なるを断ぜんと誓願し、  
法門の無尽なるを知らんと誓願し、無上菩提を証せんと  
誓願す。これを「四弘」と云う。「能」とは如來なり、「所」

しゅじょう

しぐ

のう

ほとけ

しょ

しゅじょう

さき

とは衆生なり。この四弘は、能の仏も所の衆生も、前の  
さんぎょう みなむちゅう ぜひ しゃく たま  
三教は皆夢中の是非なりと釈し給えるなり。

しかれば、法華以前の四十二年の間の説教たる諸經は、  
ほつけいぜん しじゅうにねん あいだ せつきよう しょきよう  
未顯眞実の權教なり、方便なり。法華に取り寄せるべき  
ほうべん ゆえ しんじつ

方便なるが故に、眞実にはあらず。これは、仏自ら

しじゅうにねん あいだと あつ たま のち いま ほけきよう と  
四十二年の間説き集め給いて後に、今、法華経を説かんと  
ほつ じよぶん かいきよう むりょうぎきよう とき ほとけみづか かんもん  
欲して、まず序分の開経の無量義経の時、仏自ら勘文し

たま きょうそう ひと ことば い  
ふしん な  
給える教相なれば、人の語も入るべからず、不審をも生す  
べからず。

故に、玄義に云わく「九界を権となし、仏界を実となす」

已上。九法界の権は四十二年の説教なり。仏法界の実は

八箇年の説、法華經これなり。故に、法華經をば仏乗と云

う。九界の生死は夢の理なれば、権教と云い、仏界の

常住は寤の理なれば、実教と云う。故に、五十年の

説教、一代の聖教、一切の諸經は、化他の四十二年の

権教と自行の八箇年の実教と合して五十年なれば、権と

実との二つの文字をもつて鏡に懸けて陰り無し。

故に、三藏教を修行すること三僧祇・百大劫を歴て、

つい ほとけ な おも わみ ひい けしん にゅうめつ はい な う つうぎょう しゅぎょう 終に仏に成らんと思えば、我が身より火を出だして、灰身  
入滅とて灰と成つて失せぬるなり。通教を修行すること  
しちあそうぎ ひやくだいこう み ほとけ な おも さき 七阿僧祇・百大劫を満てて、仏に成らんと思えば、前の  
どうよう けしんにゅうめつ あとかた な う ごとく同様に灰身入滅して跡形も無く失せぬるなり。  
べつきょう しゆぎょう にじゅうにだいあそうぎ ひやくせんまんこう つ 別教を修行すること二十二大阿僧祇・百千万劫を尽く  
つい ほとけ な おも しょうじ ゆめ なか ごんきょう して、終に仏に成らんと思えば、生死の夢の中の權教の  
じょうぶつ うつつ ほけきょう とき 成仏なれば、本覚の寤の法華経の時には、別教には実の  
ほとけな ほんがく ゆえ べつきょう きょうどう じつ じつ ほとけ 佛無し、夢の中の果なり。故に、別教の教道には実の仏  
な い べつきょう しようどう しょじ はじ いちぶん 無しと云うなり。別教の証道には、初地に始めて一分の

無明を断じて一分の中道の理を顕し、始めてこれを見れば、別教は隔歴不融の教えと知つて、円教に移り入つて円人と成り已わつて、別教には留まらざるなり。上・中・下の三根の不同有るが故に、初地・二地・三地乃至等覚までも円人と成る。故に、別教の面には仏無きなり。故に、「教のみ有つて人無し」と云うなり。

故に、守護国界章に云わく「有為の報仏は夢中の權果（前の三教の修行の仏）、無作の三身は覺前の実仏なり（後の円教の觀心の仏）。また云わく「權教の三身はいまだ

むじょう まぬか さき さんぎょう しゅぎょう ほとけ じつきょう さんじん 無常を免れず、前の三教の修行の仏〉、実教の三身は  
俱体俱用なり、〈後の円教の觀心の仏〉。この釈を能く能  
く意得べきなり。權教は難行苦行して、たまたま仏に成  
りぬと思えば、夢の中の權の仏なれば、本覺の寤の時に  
は実の仏無きなり。極果の仏無ければ、「教のみ有つて人  
無し」なり。いわんや教法實ならんや。これを取つて修行  
せんは、聖教に迷えるなり。この前の三教には仏に成ら  
ざる証拠を説き置き置いて、末代の衆生に慧解を開かしむ  
るなり。

九界の衆生は、一念の無明の眠りの中において、生死の夢  
に溺れて本覚の寤を忘れ、夢の是非に執して冥きより冥き  
に入る。この故に、如来は我らが生死の夢の中に入つて、顛倒  
の衆生に同じて夢の中の語をもつて夢の中の衆生を誘  
い、夢の中の善惡の差別の事を説いて漸々に誘引し給うに、  
夢の中の善惡の事重疊して様々に無量無邊なれば、まず  
善事について上・中・下を立つ。三乗の法これなり。  
三三九品なり。かくの三とく説き已わつて後に、また上上  
品の根本善を立て、上・中・下の三三九品の善と云う。皆

くかいしようじ ゆめ なか ぜんあく ぜひ  
ことごとく九界生死の夢の中の善悪・是非なり。今これを

そう

じやけんげどう

そうようき

い

ば総じて邪見外道となす〈搜要記の意〉。

この上に、また、「上上品の善心は本覚の寤の理な

ぜん

ほん

い

と

き

たま

とき

ゆめ

のたま

れば、これを善の本と云う」と説き聞かせ給いし時に、夢の

なか

ぜんあく

さと

ちから

ゆえ

うつつ

ほんしん

じつそう

じ

中の善惡の悟りの力をもつての故に、寤の本心の実相の

り はじ もんち

理を始めて聞知せらるることなり。この時に仏説いて言

ゆめ

うつつ

ふた

こじ

じつじ

ふた

じ

わく「夢と寤との二つは虚事と実事との二つの事なれども、

しんぽう

ひと

ふた

ねむ

えん

あ

ゆめ

ねむ

さ

心法はただ一つなり。眠りの縁に値いぬれば夢なり。眠り去

うつつ

ここる

しんぽう

ひと

かいえ

りぬれば寤の心なり。心法はただ一つなり」。開会せらる

べき下地を造り置かれし方便なり。これは別教の中道の理なり。

この故に、いまだ十界互具・円融相即を顯さざれば、成仏の人無し。故に、三藏教より別教に至るまで、四十二年の間の八教は、皆ことごとく方便なり、夢の中の善惡なり。ただしばらくこれを用いて衆生を誘引し給う支度・方便なり。

この權教の中にも、分々に皆ことごとく方便と眞実と有つて、權實の法闕けざるなり。四教一々に各四門有つて

差別有ることなし。語もただ同じ語なり。文字も異なることなし。これに由つて語に迷つて権実の差別を分別せざる時を、仏法滅すと云う。

この方便の教えは、ただ穢土に有つて、總じて淨土には無きなり。法華經に云わく「十方の仏土の中には、ただ一乗の法のみ有り。二無くまた三無し。仏の方便の説を除く」已上。故に知んぬ、十方の仏土に無き方便の教えを取つて往生の行となし、十方の淨土に有る一乗の法をば、これを嫌つて取らずして成仏すべき道理有るべしや否や。

いちだい きょうしゅ しゃかによらい いつさいきょう と かんもん たま のたま  
一代の教主・釈迦如來、一切經を説き勘文し給いて言  
さんぜ しょぶつ どうよう ひと ことばひと こころ かんもん たま  
わく「三世の諸仏、同様に一つ語一つ心に勘文し給える  
せっぽう ぎしき われ  
説法の儀式なれば、我もかくのごとく、一言も違わざる  
せつきよう しだい うんぬん ほうべんぽん い  
説教の次第なり」云々。方便品に云わく「三世の諸仏の説法  
ぎしき われ いま  
の儀式のごとく、我も今またかくのごとく無分別の法を説  
いじよう むふんべつ ほう さんせ しょぶつ せっぽう  
く」已上。「無分別の法」とは一乗の妙法なり。善惡を簡  
そうもく じゅりん さんか むふんべつ ほう と  
ぶことなく、草木・樹林・山河・大地にも一微塵の中にも、  
たが おののおのじっぽうかい ほう ぐそく わ こころ みょうほうれんげきょう  
互いに各十法界の法を具足す。我が心の妙法蓮華經の  
いちじょう じっぽう じょうど しゅうへん なか  
一乗は、十方の淨土に周遍して闕くることなし。十方の  
じっぽう

じょうど　えほう　しょうほう　くどくしょうごん　わ　こころ　なか　あ  
淨土の依報・正報の功德莊嚴は、我が心の中に有つて  
かたとき　はな  
片時も離るることなき三身即一の本覚の如來にて、この外  
には法無し。この一法ばかり十方の淨土に有つて、余法有る  
には法無し。故に「無分別の法」と云うはこれなり。この一乘  
ことなし。故に「無分別の法」と云うはこれなり。この一乘  
妙法の行をば取らずして、全く淨土には無き方便の教え  
を取つて成仏の行となさんは、迷いの中の迷いなり。我  
佛に成つて後に穢土に立ち還つて、穢土の衆生を仏法界  
に入らしめんがために、次第に誘入して方便の教えを説く  
を、化他の教えとは云うなり。故に、權教と言ひ、また方便  
けた　おし  
い  
ゆえ  
ごんきょう　い  
ほうべん  
ほうべん  
ほうべん　おし  
と  
い  
ゆうにゅう  
えど　しうじよう　ぶっぽうかい  
ほうべん  
ほうべん  
ほか

とも云う。

けた ほうもん あ さま だいたい りやく そん

化他の法門の有り様、大体、略を存して、かくのごとし。

に じぎょう ほう ほけきょうはちかねん せつ

二に自行の法とは、これ法華経八箇年の説なり。この經

うつつ ほんしん と しゅじょう おも なら キょう ゆめ

は寤の本心を説きたもう。ただ、衆生の思い習わせる夢の

なか しんじ ゆえ ゆめ なか ごんご か うつつ ほんしん おし

中の心地なるが故に、夢の中の言語を借りて寤の本心を訓

ゆえ ことば ゆめ なか ごんご うつつ ほんしん おし

うるなり。故に、語は夢の中の言語なれども、意は寤の

ほんしん おし ほけきょう もん しゃく こころ

本心を訓う。法華経の文と釈との意かくのごとし。これ

あき しきょう もん しゃく もん からら まよ

を明らめ知らずんば、経の文と釈の文とに必ず迷うべき

けた ゆめ なか ほうもん うつつ ほんしん そな

なり。ただし、この化他の夢の中の法門も寤の本心に備わ

とくゆう ほうもん ぬめ なか おし うつ こころ  
れる徳用の法門なれば、夢の中の教えを取つて寤の心に  
おさ  
撮むるが故に、四十二年の夢の中の化他・方便の法門も  
ゆえ しじゅうにねん ゆめ なか けた ほうべん ほうもん  
みょうほうれんげきょう うつ こころ おさ  
妙法蓮華経の寤の心に撮まつて、心の外には法無し。  
ほけきょう かいえ い  
これを法華経の開会とは云うなり。譬えば衆流を大海に納  
こころ ほか ほか ほうな  
むるがごときなり。

ほとけ しんぱうみょう しゅじょう しんぱうみょう  
仏の心法妙と衆生の心法妙と、この二妙を取つて己  
しん ゆえ こころ ほか ほうな  
心に撮むるが故に、心の外に法無きなり。己心と心性と  
しんたい みつ こしん しんしよう  
心体との三つは、己身の本覚の三身如来なり。これを經に  
と い によぜそら おうじんによらい  
説いて云わく「如是相〈應身如來〉・如是性〈報身如來〉・  
によぜしょう ほうしんによらい

によぜたい ほっしんによらい

さんによぜ

い

さんによぜ

如是体 〈法身如來〉。これを三如是と云う。この三如是の

ほんがく によらい じっぽうほうかい しんたい

じっぽうほうかい しんしよう

本覺の如來は、十方法界を身體となし、十方法界を心性と

じっぽうほうかい そうごう

ゆえ

わ

み

ほんがく

さん

なし、十方法界を相好となす。この故に、我が身は本覺の三  
じんによらい しんたい

ほうかい しゅうへん

いちぶつ

とくよう

ざせき

づら

と たま

とき

も

み

みな

一切法は皆これ仏法なり」と説き給いし時、その座席に列

もるもる

しじゅ

はちぶ

ちくしょう

げどうとういちにん

も

た

どころ

さんし

なりし諸の四衆・八部・畜生・外道等一人も漏れず、皆

もうぞう

ひがめ

ひがおも

げどうとういちにん

も

た

どころ

ほんがく

ことどく妄想の僻目・僻思い、立ち所に散止して、本覺

うつつ かえ

みなぶつどう

じよう

の寤に還つて皆仏道を成す。

ほとけ

うつつ

ひと

しゅじょう

ゆめみ

ひと

ゆえ

私は寤の人のごとく、衆生は夢見る人のごとし。故に、

生死の虚夢を醒まして本覚の寤に還るを、即身成仏とも、平等大慧とも、無分別法とも、皆成仏道とも云う。ただ一つの法門なり。十方の仏土は区に分かれたりといえども、通じて法は一乗なり。方便無きが故に無分別法なり。十界の衆生は品々に異なりといえども、実相の理は一つなるが故に無分別なり。百界千如・三千世間の法門殊なりといえども、十界互具するが故に無分別なり。夢と寤と、虛と実と、各別異なりといえども、一心の中の法なるが故に無分別なり。過去と未来と現在とは三つなりといえども、

いちねん

しんちゅう

り

むふんべつ

# 一念の心中の理なれば無分別なり。

「一切經の語は夢の中の語」とは、譬えば扇と樹とのごとし。「法華經の寤の心を顯す言」とは、譬えば月と風とのごとし。故に、本覺の寤の心の月輪の光は無明の闇を照らし、實相般若の智慧の風は妄想の塵を払う故に、夢の語の扇と樹とをもつて寤の心の月と風とを知らしむ。この故に、夢の余波を散じて寤の本心に帰せしむるなり。

故に、止觀に云わく「月重山に隠るれば扇を挙げてこ

れに類し、風大虛に息みぬれば樹を動かしてこれを訓うる  
がごとし」文。弘決に云わく「真常性の月、煩惱の山に隠  
る。煩惱は一つにあらず、故に名づけて重となす。円音教  
の風は化を息めて寂に帰す。寂理無礙なること、なお大虛  
のごとし。四依の弘教は扇と樹とのごとし乃至月と風とを  
知らしむるなり」已上。夢の中の煩惱の雲重疊せること山  
のごとく、その数八万四千の塵勞にて、心性本覺の月輪を  
隠す。扇と樹とのごとくなる経論の文字・言語の教えを  
もつて、月と風とのごとくなる本覺の理を覺知せしむる

聖教なり。故に、文と語とは扇と樹とのごとし文。  
上の釈は一往の釈とて実義にあらざるなり。月のごと  
くなる妙法の心性の月輪と、風のごとくなる我が心の  
般若の慧解とを訓え知らしむるを、妙法蓮華経と名づく。  
故に、釈籤に云わく「声色の近名を尋ねて無相の極理に  
至らしむ」已上。「声色の近名」とは、扇と樹とのごと  
くなる夢の中の一切の経論の言説なり。「無相の極理」と  
は、月と風とのごとくなる寤の我が身の心性の寂光の  
極楽なり。

この極楽とは、十方法界の正報の有情と十方法界の依報  
の国土と和合して一体なり。三身即一・四土不二の法身の一  
仏なり。十界を身となすは法身なり。十界を心となすは  
報身なり。十界を形となすは應身なり。十界の外に仏無く  
仏の外に十界無くして、依正不二なり、身土不二なり。  
一仏の身体なるをもつて寂光土と云う。この故に無相の極  
理とは云うなり。生滅無常の相を離れたるが故に無相と云  
うなり。「法性の淵底、玄宗の極地」なり。故に極理と云  
う。この無相の極理なる寂光の極楽は、一切有情の心性の

なか あ しょうじょう むろ な みようほう しん  
中に有つて 清淨・無漏なり。これを名づけて「妙法の心  
れんだい れんだい い こころ ほか べつ ほうな  
蓮台」とは云うなり。この故に、「心の外に別の法無し」  
い いっさいほう みな ふっぽう つうだつ げりよう  
と云う。これを「一切法は皆これ仏法なりと通達し解了す」  
い  
とは云うなり。

しょう し ふた ことわり しょうじ ゆめ ことわり もうぞう  
生と死と一つの理は、生死の夢の理なり、妄想なり、  
てんどう ほんがく うつつ わ しんしよう ただ しょう  
顛倒なり。本覚の寤をもつて我が心性を糾せば、生ずべ  
はじ な ゆえ し お な すぐ しょうじ はな  
き始めも無きが故に、死すべき終わりも無し。既に生死を離  
しんぽう ごうか や すいきい く  
れたる心法にあらずや。劫火にも焼けず、水災にも朽ちず、  
けんとう き きゅうせん い  
剣刀にも切られず、弓箭にも射られず。芥子の中に入れど  
けし なか い

けし ひろ しんぼう ちぢ こくう なか み  
も、芥子も広からず、心法も縮まらず。虚空の中に満つれど  
も、虚空も広からず、心法も狭からず。  
善に背くを悪と云い、悪に背くを善と云う。故に、心の  
外に善無く悪無し。この善と悪とを離るるを無記と云うな  
り。善・惡・無記、この外には心無く、心の外には法無き  
なり。故に、善惡も、淨穢も、凡夫・聖人も、天地も、大小  
も、東西南北・四維・上下も、言語の道断え、心行の所滅  
す。心に分別して思い言い顕す言語なれば、心の外には  
分別も無分別も無し。言と云うは、心の思いを響かして声  
ふんべつ むふんべつ な ことば い こころ おも ひび こえ

あらわい ぼんぶ わ こころ まよ し さと  
を顕すを云うなり。凡夫は我が心に迷つて、知らず覺らず  
るなり。仏はこれを悟り顕して神通と名づくるなり。神通  
とは、神の一切の法に通じて礙り無きなり。この自在の  
神通は、一切の有情の心にてあるなり。故に、狐狸も分々に  
通を現ずること、皆、心の神の分々の悟りなり。この心  
の一法より国土世間も出来することなり。

いちだいしようぎょう じ と  
一代聖教とは、この事を説きたるなり。これを八万四千  
の法藏とは云うなり。これ皆「ことゞ」とく一人の身中の法門  
にてあるなり。しかれば、八万四千の法藏は我が身一人の

につきもんじよ

はちまんほうぞう

わ

しんちゅう

はら

たも

いだ

たも

日記文書なり。この八万法藏を我が心中に孕み持ち、懷き持ちたり。我が身中の心をもつて、仏と法と淨土とを我が身

わ  
しんちゅう  
ここころ  
ほとけ  
ほう  
じょうぶ  
わ  
み

より外に思い願い求むるを迷いとは云うなり。この心が、

ほか  
おも  
ねが  
もと  
まよ  
い

ここころ  
い

善惡の縁に值つて善惡の法をば造り出だせるなり。

ぜんあく  
えん  
あ

ぜんあく  
ほう  
つく  
い

華嚴經に云わく「心は工みなる画師の種々の五陰を造る

けごんきよう  
い  
こころ  
たく

いつさいせけん  
なか  
ほう

つく

えし  
しゅじゅ  
ごおん  
つく

がごとく、一切世間の中に法として造らざることなし。心

ほとけ  
ほとけ  
ほとけ  
ほとけ  
ほとけ  
ほとけ  
ほとけ  
ほとけ

しゅじょう  
しゅじょう  
しゅじょう  
しゅじょう  
しゅじょう  
しゅじょう  
しゅじょう  
しゅじょう

のごとく仏もまたしかなり。仏のごとく衆生もしかなり。

さんがい  
さんがい  
さんがい  
さんがい  
さんがい  
さんがい  
さんがい  
さんがい

三界は、ただ一心なり。心の外に別の法無し。心、仏お

しうじょう  
みつ  
さべつな  
いじょう  
むりようぎきよう  
い

より衆生、この三つは差別無し」已上。無量義經に云わく

「相無く相ならざる一法より無量義を出生す」已上。「相無く相ならざる一法」とは、一切衆生の一念の心これなり。文句に釈して云わく「生滅無常の相無きが故に、『相無し』と云うなり。二乗の有余・無余の二つの涅槃の相を離るるが故に、『相ならず』と云うなり」云々。心の不思議をもつて経論の詮要となすなり。

この心を悟り知るを名づけて如來と云う。これを悟り知つて後は、十界は我が身なり、我が心なり、我が形なり。本覺の如來は我が身心なるが故なり。これを知らざる時を

な

むみょう

むみょう

あき

よ

名づけて無明となす。無明は「明らかなることなし」と読む  
なり。我が心の有り様を明らかに覺らざるなり。これを悟  
り知る時を名づけて法性と云う。故に、無明と法性とは  
一心の異名なり。名言は二つなりといえども、心はただ一  
つ心なり。これに由つて、無明をば断ずべからざるなり。  
夢の心の無明なるを断ぜば、寤の心を失うべきが故な  
り。總じて円教の意は一毫の惑をも断ぜず。故に、「一切法  
は皆これ仏法なり」と云うなり。

法華経に云わく「如是相へ一切衆生の相好、本覚の応身  
は皆これ仏法なり」と云うなり。

によらい によぜしよう いつきいしゅじょう しんしよう ほんがく ほうしんによらい によぜたい  
如來・如是性 へ一切衆生の心性、本覺の報身如來・如是体  
いつさいしゅじょう しんたい ほんがく ほつしんによらい さんによぜ のち  
へ一切衆生の身體、本覺の法身如來」。この三如是より後  
しちによぜしゅっしよう がつ じゅうによぜ な  
の七如是出生して、合して十如是と成るなり。この十如是  
じっぽうかい ひとり じゅうによぜ  
は十法界なり。この十法界は一人の心より出でて、八万四千  
ほうもん な ひとり てほん  
の法門と成るなり。一人を手本として一切衆生平等なるこ  
と、かくのごとし。三世の諸仏の總勘文にして、御判たしか  
しる しょうほん もんじよ ほとけ ごはん じつそう いちいん  
に印したる正本の文書なり。仏の御判とは実相の一印な  
り。印とは判の異名なり。余の一切の經には実相の印無け  
り。印とは判の異名なり。余の一切の經には実相の印無け  
れば、正本の文書にあらず。全く実の仏無し。実の仏無

きが故に、夢の中の文書なり。淨土に無きが故なり。

じっぽうかい

じゅう

じゅうによぜ

ひと

たと

すいちゅう

ゆえ

ゆめ

なか もんじょ

じょうど な

ゆえ

十法界は十なれども、十如是は一つなり。譬えば、水中

つき むりよう

こくう つき ひと

の月は無量なりといえども、虛空の月は一つなるがごとし。

くほうかい

じゅうによぜ

ゆめ なか

じゅうによぜ

ゆえ

すいちゅう

つき

九法界の十如是は、夢の中の十如是なるが故に、水中の月

くほうかい

ぶっぽうかい

ゆめ なか

じゅうによぜ

ゆえ

すいちゅう

つき

のごとし。仏法界の十如是は、本覺の寤の十如是なれば、

こくう つき

ゆえ

ほんがく うつつ

ゆえ

じゅうによぜあらわ

つき

虛空の月のごとし。この故に、仏界の一つの十如是顯れぬ

くほうかい

じゅうによぜ

ゆめ なか

じゅうによぜ

ゆえ

すいちゅう

つき

れば、九法界の十如是の水中の月のごときも一つも闕滅無

どうじ

みなあらわ

ゆえ なか

じゅうによぜ

ゆえ

すいちゅう

つき

く同時に皆顯れて、体と用と一具にして一体の仏と成る。

じっぽうかい

たが

ぐそく

びょうどう

じつかい

しゅじょう

十法界を互いに具足して平等なる十界の衆生なれば、

虚空の本月も水中の末月も一人の身中に具足して闕くることなし。故に、十如是は本末究竟して等しく差別無し。本とは衆生の十如是なり。末とは諸仏の十如是なり。諸仏は衆生の一念の心より顯れ給えば、衆生はこれ本なり、諸仏はこれ末なり。

しかるを、經に云わく「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」已上。仏成道の後に、化他のための故に迹の成道を唱えて、生死の夢の中にして本覚の寤を説きたもうなり。智慧を父

たと ぐち こ たと  
に譬え、愚癡を子に譬えて、かくのぞとく説き給えるなり。  
しゅじょう ほんがく じゅうによぜ  
衆生は本覚の十如是なりといえども、一念の無明眠りのご  
こころ おお しょうじ ゆめ い ほんがく ことわり わす かみすじ  
とく心を覆い、生死の夢に入つて本覚の理を忘れ、髮筋  
き かこ げんざい みらい さんぜ こむ み  
を切るほどに過去・現在・未来の三世の虚夢を見るなり。仏  
うつつ ひと しょうじ ゆめ い しゅじょう おどろ  
は寤の人のごとくなれば、生死の夢に入つて衆生を驚か  
たま ちえ ゆめ なか ふぼ しゆめ なか われ  
し給える智慧は、夢の中で父母のごとく、夢の中なる我ら  
しそく のたも どうり  
は子息のごとくなり。この道理をもつて「こ」と「ご」とくこれ吾  
こ ことわり おも ほど しょぶつ われ  
が子なり」と言うなり。この理を思い解けば、諸仏と我  
わ  
らとは本の故にも父子なり、末の故にも父子なり。父子の  
ほん ゆえ ふし まつ ゆえ ふし ふし

天性は本末これ同じ。これに由つて己心と仏心とは異ならずと観するが故に、生死の夢を覚まして本覚の寤に還るを、即身成仏と云うなり。即身成仏は、今、我が身の上の天性・地体なり。煩いも無く、障りも無し。衆生の運命なり、果報なり、冥加なり。

夫れ以んみれば、夢の時の心を迷いに譬え、寤の時の心を悟りに譬う。これをもつて一代聖教を覚悟するに、跡形も無き虚夢を見て心を苦しめ、汗水を成して驚きぬれば、我が身も家も臥所も一所にて異ならず、夢の虚と寤

の実との二事を目にも見、心にも思えども、所もただ一所  
なり、身もただ一身なり。二つの虚と実との事有るは、こ  
れをもつて知るべし。九界生死の夢見る我が心も仏界  
常住の寤の心も異ならず。九界生死の夢見る所が仏界  
常住の寤の所にて変わらず。心法も替わらず、在所も差  
わざれども、夢は皆虚事なり、寤は皆実事なり。  
止觀に云わく「昔莊周といふもの有り。夢に胡蝶と成つ  
て一百年を経たり。苦は多く樂は少なく、汗水を成して驚  
きぬれば、胡蝶にも成らず百年をも経ず、苦も無く樂も無

みなこじ みなもうそう いじょうしゅい ぐけつ い むみよう  
し。皆虚事なり。皆妄想なり」已上取意。弘決に云わく「無明  
は夢の蝶のごとく、三千は百年のごとし。一念実無きは  
なお蝶にあらざるがごとく、三千もまた無きこと年を積む  
にあらざるがごとし」已上。この釈は即身成仏の証拠な  
り。夢に蝶と成る時も莊周は異ならず、寤に蝶と成ら  
ずと思う時も別の莊周無し。我が身を生死の凡夫なりと思  
う時は、夢に蝶と成るがごとく、僻目・僻思いなり。我が  
身は本覚の如來なりと思う時は、本の莊周なるがごとし。  
即身成仏にして、蝶の身をもつて成仏すと云うにはあら  
そくしんじょうぶつ ちよう み ほんがく によらい おも とき ひがめ ひがおも  
い じょうぶつ み

ざるなり。蝶と思は虚事なれば、成仏の言無し。沙汰の外のことなり。無明は夢の蝶のごとくと判ずれば、我らが僻思いはなお昨日の夢のごとく、性・体無き妄想なり。誰の人か虚夢の生死を信受して疑いを常住涅槃の仏性に生ぜんや。

止觀に云わく「無明癡惑、本よりこれ法性なり。癡迷をもつての故に、法性変じて無明と作り、諸の顛倒の善・不善等を起こす。寒來つて水を結べば変じて堅氷と作るがごとく、また眠り来つて心を変ずれば種々の夢有るがごと

し。今當に諸の顛倒は即ちこれ法性にして一ならず異  
ならずと体すべし。顛倒起滅すること旋火輪のごとしとい  
えども、顛倒の起滅を信ぜずして、ただこの心ただこれ  
法性なりと信ず。起はこれ法性の起、滅はこれ法性の滅  
なり。それ実には起滅せざるをみだりに起滅すと謂うと体  
す。ただ妄想を指すにことごとくこれ法性なり。法性を  
もつて法性に繋け、法性をもつて法性を念ず。常にこれ  
法性なり。法性ならざる時無し」已上。かくのことく、  
法性ならざる時の隙も無き理の法性に、夢の蝶のごとく、

むみょう

じつう

おも

しよう

まよ

くなる無明において実有の思いを生じてこれに迷うなり。

しかん

くい

たと

ねむ

ほう

こころ

おお

いちねん

まい

めつ

いぢくめつしんによ

なん

止觀の九に云わく「譬えば、眠りの法、心を覆つて、一念

むりょうせ

じゆめ

ないし

いつさいしゅじょうすなわ

だいねはん

まい

まい

まい

まい

まい

まい

の中に無量世の事を夢みるがごとし」乃至「寂滅真如に何

じい

あ

なん

ないし

いつさいしゅじょうすなわ

だいねはん

まい

まい

まい

まい

まい

まい

の次位か有らん」乃至「一切衆生即ち大涅槃なり。また滅

じい

あ

なん

ないし

いつさいしゅじょうすなわ

だいねはん

まい

まい

まい

まい

まい

まい

すべからず。何の次位・高下・大小有らんや。不生不生に

ふかせつ

じゅういんねん

ほう

しよう

いんねんあ

ゆえ

ゆえ

と

う

う

う

して不可説なれども、因縁有るが故に、また説くことを得べ

じゅういんねん

ほう

しよう

いんねんあ

ゆえ

ゆえ

と

う

う

う

う

し。十因縁の法、生のために因と作る。虚空に画き方便も

きう

いっさい

くらい

と

う

う

う

う

う

う

う

て樹を種うるがごとく、一切の位を説くのみ」已上。

じっぽうかい

えほう

しょうほう

ほつしん

ほとけ

いつたいさんじん

とく

十法界の依報・正報は法身の仏の一体三身の徳なりと

し  
いつさいほう みな ぶっぽう つうだつ げりよう  
みょうじそく くらい そくしんじょうぶつ ゆえ えんどん  
みょうじそく くらい まつだい がくしゃ  
の教には次位の次第無し。故に、玄義に云わく「末代の学者、  
多く経論の方便の断伏を執して諍鬪す。水の性の冷や  
やかなるがごときも、飲まずんばいづくんぞ知らん」已上。  
天台の判に云わく「次位の綱目は仁王・瓔珞に依り、断伏の  
高下は大品・智論に依る」已上。仁王・瓔珞・大品・大智度論、  
この経論は皆、法華已前の八教の経論なり。權教の行  
は無量劫を経て昇進する次位なれば、位の次第を説けり。

いま ほつけ はつきよう こ そくしつとんじょう ここる

今の法華は八教に超えたる円なれば速疾頓成にして、心

と仏と衆生と、この三つは我が一念の心中に摂めて心

の外に無しと観すれば、下根の行者すら、なお一生の中に

妙覚の位に入る。一と多と相即すれば、一つの位に一切

の位皆これ具足せり。故に一生に入るなり。下根すら、

かくのごとし。いわんや中根の者をや。いかにいわんや

上根をや。実相の外にさらに別の法無し。実相には次第無

きが故に位無し。

いま ほつけ はつきよう こ そくしつとんじょう ここる  
ほとけ しゅじょう  
ほか な  
みつ わ いちねん しんちゅう おさ  
みようかく くらい  
ほか い いち  
くらいみな ぐそく  
ゆえ いっしょ  
ちゅうこん もの  
じょうこん  
じつそう  
ほか  
べつ ほうな  
じつそう  
しだいな  
わ み ほんたい よ  
そう いちだい  
しようぎょう  
ひとり  
ほう  
今  
の法華は八  
教に超えたる  
円なれば速疾頓成にして、心  
と仏と衆生と、  
この三つは我が一念の心中に摂めて心  
の外に無しと観すれば、下根の行者すら、なお一生の中に  
妙覚の位に入る。一と多と相即すれば、一つの位に一切  
の位皆これ具足せり。故に一生に入るなり。下根すら、  
かくのごとし。いわんや中根の者をや。いかにいわんや  
上根をや。実相の外にさらに別の法無し。実相には次第無  
きが故に位無し。

総じて一代の聖教は一人の法なれば、我が身の本体を能

よ　し　さと　ほとけ　い　まよ  
く能く知るべし。これを悟るを仏と云い、これに迷うは  
衆生なり。これは華嚴經の文の意なり。

しゅじょう　けいんきょう　もん　こころ

ぐけつ　ろく　い　み　なか　てんち　なら  
し　こうべ　まど　み　かたど　かたど　あし　ほう  
弘決の六に云わく「この身の中につぶさに天地に倣うこと  
を知る。知んぬ、頭の円かなるは天に象り、足の方なるは  
地に象り、身の内の空種なるは即ちこれ虚空なり。腹の温  
かなるは春夏に法り、背の剛きは秋冬に法り、四体は四時  
に法り、大節の十二は十二月に法り、小節の三百六十は  
三百六十日に法り、鼻の息の出入りは山沢渓谷の中の風  
に法り、口の息の出入りは虚空の中の風に法り、眼は日月

のつと　だいせつ　じゅうに　のつと　はな　いき　でい　のつと　はら　あたた  
のつと　さんびやくろくじゅうにち　のつと　はな　いき　でい　のつと　さんたくけいこく　なか  
のつと　くち　いき　でい　こくう　なか　かぜ　のつと　まなこ　にちがつ

に法り、開閉は昼夜に法り、髪は星辰に法り、眉は北斗に  
法り、脈は江河に法り、骨は玉石に法り、皮肉は地土に  
法り、毛は叢林に法り、五臟は天に在つては五星に法り、  
地に在つては五岳に法り、陰陽に在つては五行に法り、世  
に在つては五常に法り、内に在つては五神に法り、行を  
修するには五徳に法り、罪を治するには五刑に法る。謂わ  
く墨・劓・荆・宮・大辟なり。この五刑は人を様々にこれ  
を傷ましむ。その数三千の罰有り。これを五刑と云う。  
主領には五官となす。五官は下の第八の巻に博物志を引く

がごとし。謂わく句芒等なり。天に昇つては五雲と曰い、化

して五竜となる。心を朱雀となし、腎を玄武となし、肝を

青竜となし、肺を白虎となし、脾を勾陳となす」。

また云わく「五音・五明・六芸、皆これより起ころ。ま

た當に内治の法を識るべし。覺心は内に大王となつて

百重の内に居し、出でては則ち五官に侍衛せらる。肺を

司馬となし、肝を司徒となし、脾を司空となし、四支を民子

となし、左を司命となし、右を司錄となし、人の命を主司

る。乃至、臍を太一君となす等と。禪門の中に廣くその相を

明かす」已上。

じんしん

ほんたいいくわ

けん

人身の本体委しく検すれば、かくのごとし。

しかるに、この金剛不壞の身をもつて生滅無常の身なりと思う僻思

しようめつむじょう み

おも ひがおも

いは、「譬えば莊周が夢の蝶のごとし」と釈し給えるな

たと

そうしゅう ゆめ

ちよう

しゃく たま

り。五行とは地水火風空なり。五大種とも、五蘊とも、五戒

ごぎょう

ちすいかふうくう

ごだいしゅ

ごうん

ごかい

とも、五常とも、五方とも、五智とも、五時ともいう。た

ひと

もの

きょうぎょう

いせつ

ないてん

げてん

みょうもく

ご

だ一つの物にして経々の異説なり。内典・外典の名目の

いみよう

こんきょう

かい

いつさい

しゅじょう

しんちゅう

ご

異名なり。今経にこれを開して一切衆生の心中の五

ぶつしょう

ごち

によらい

しゅし

と

仮性・五智の如來の種子なりと説けり。これ則ち

すなわ

みょうほうれんげきょう

ごじ

ごじ

じんしん

たい

つく

妙法蓮華經の五字なり。この五字をもつて人身の体を造る

ほんぬじょうじゅう

ほんがく

によらい

じゅうによぜ

い

なり。本有常住なり、本覺の如來なり。これを十如是と云

ほとけ ほとけ

う。これを「ただ仏と仏とのみ、いまし能く究尽したま

い

ふたい

ぼさつ

ごっか

にじょう

じょうぶん

しょうぶん

し

えり」と云う。不退の菩薩と極果の一乗と、少分も知らざ

ゆえ ほうもん

えんどん

ぼんぶ

しょしん

しょうぶん

しょうぶん

し

る法門なり。しかるを円頓の凡夫は初心よりこれを知るが

ゆえ そくしんじょうぶつ

こころうふえ

たい

故に、即身成仏するなり。金剛不壞の体なり。

あき

し

てんくず

わ

み

くず

ここをもつて明らかに知るべし。天崩れば我が身も崩るべ

ちき

わ

み

さ

ちすいかふうめつぼう

わ

み

し。地裂けば我が身も裂くべし。地水火風滅亡せば我が身も

めつぼう

ごだいしゅ

かこ

げんざい

みらい

また滅亡すべし。しかるに、この五大種は、過去・現在・未来

の三世は替わるといえども、五大種は替わることなし。

しようほうぞうほうまっぽうさんじこと

ごだいしゅか

正法と像法と末法との三時殊なりといえども、五大種はこれ一つにして盛衰・転変無し。

ひとせいせいてんぺんな

えんぎょうり

だいち

えんどん

きょうくう

薬草喻品の疏には「円教の理は大地なり。円頓の教は空

さんぞうきようつうぎようべつきよう

さんぎよう

さんそう

にもく

の雨なり。また三蔵教・通教・別教の三教は、三草と二木

ゆえゆえ

えんり

だいち

しよう

となり。その故は、この草木は、円理の大地より生じて

えんぎょうくうあめやしな

そともくさか

ゆえ

てんち

円教の空の雨に養われて五乗の草木は栄うれども、天地

よわれさかおもし

そともく

ゆえ

さんきよう

に依つて我栄えたりと思い知らざるに由るが故に、三教の

にんてんにじようぼさつそともくたと

ふちおん

人天・二乘・菩薩をば草木に譬えて説きたり。不知恩なる

が故に、草木の名を得。今、法華に始めて、五乗の草木は、  
円理の母と圓教の父とを知るなり。『一地の生むところ』  
なれば母の恩を知るがごとく、『一雨の潤すところ』なれ  
ば父の恩を知るがごとし。薬草喻品の意、かくのごとく  
なり。

釈迦如來、五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐しませし時、  
我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座に悟りを開き  
たまいき。後に化他のために世々番々に出世・成道し、在々  
処々に八相作仏し、王宮に誕生し、樹下に成道して、始め

て仏に成る様を衆生に見知らしめ、四十余年に方便の教えを儲け衆生を誘引す。その後、方便の諸の経教を捨てて、正直の妙法蓮華経の五智の如来の種子の理を説きて、顕して、その中に四十二年の方便の諸経を丸かし納れて一仏乗と丸じ、人一の法と名づく。一人が上の法なり。多人の綺えざる正しき文書を造つて慥かなる御判の印あり。三世の諸仏の手継ぎの文書を釈迦仏より相伝せられし時に、三千三百万億那由他の国土の上の虚空の中に満ち塞がれるそこばくの菩薩たちの頂を摩で尽くして、時を指し

まつぱうこのごる われ しゅじょう

よし と き

て末法近來の我ら衆生のためにたしかにこの由を説き聞  
かせて、仏の譲り状をもつて「末代の衆生にたしかに  
授与すべし」と、懇懃に三度まで同じ御語に説き給いしか  
ば、そこばくの菩薩たち各数を尽くして躬を曲げ頭を低  
れ、三度まで同じ言に、各、「我も劣らじ」と事請けを申  
し給いしかば、仏心安く思しめして本覚の都に還りたも  
う。三世の諸仏の説法の儀式・作法には、ただ同じ御言に時  
を指したる末代の譲り状なれば、ただ一向に後の五百歳を  
指して、「この妙法蓮華經をもつて成仏すべき時なり」と、

ゆず　じょう　おもて　の  
譲り状の面に載せられたる手継ぎ証文なり。

あんらくぎょうほん  
安樂行品には、末法に入つて近來の初心の凡夫、法華經

を修行して成仏すべき様を説き置かれしなり。身

あんらくぎょう  
くあんらくぎょう  
いあんらくぎょう  
せいがんあんらく  
ほけきょう  
さんざう  
しん  
安樂行・口安樂行・意安樂行の自行の三業も、誓願安樂

けた　ぎょう　おな  
のち　まつせ　ほうめつ  
とき  
の化他の行も、同じく「後の末世の法滅せんと欲せん時に

おいて」云々。これは近來の時なり。已上、四所に有り。

やくおうほん  
にしょ　と  
かんぽっぽん  
さんしょ　と  
みな  
薬王品には二所に説かれ、勸發品には三所に説かれたり。皆、

このごろ　さ  
まさ　もんじょ　もち  
みな  
近來を指して譲り置かれたる正しき文書をば用いらずして、

ぼんぶ　ことば　つ　ぐち　こころ　まか  
凡夫の言に付き、愚癡の心に任せて、三世の諸仏の譲り

じょう そむ たてまつ なが ぶっぽう そむ さんぜ しょぶつ  
状に背き奉り、永く仏法に背けば、三世の諸仏いかに  
ほいな くちお こころう なげ かな おぼ  
本意無く口惜しく、心憂く、歎き悲しみ思しめすらん。  
ねはんぎよう い ほう よ ひと よ  
涅槃經に云わく「法に依つて人にいらざれ」云々。痛まし  
かな  
ぶっぽう めつ  
いかな、悲しいかな、末代の学者、仏法を習学して還つて  
まつだい がくしゃ ぶっぽう しゅうがく  
仏法を滅す。  
ぐけつ  
かた  
弘決にこれを悲しんで曰わく「この円頓を聞いて崇重せ  
まこと きんだい だいじょう なら もの ぞうらん よ ゆえ  
ざるは、良に近代に大乗を習う者の雑濫に由るが故なり。  
ぞうまつ じょううす しんじんかはく  
いわんや、像末は情澆く信心寡薄にして、円頓の教法藏に  
えんどん き すうちょう  
溢れ函に盈つれども、しばらくも思惟せず、便ち瞑目に至  
あふ はこ み  
しゆい  
すなわ みょうもく  
いた

る。いたずらに生じ、いたずらに死す。一に何ぞ痛ましき  
や」已上。同四に云わく「しかるに、円頓の教えは本凡夫に  
被らしむ。もし凡を益するに擬せズんば、仏何ぞ自ら  
法性の土に住して、法性の身をもつて諸の菩薩のため  
にこの円頓を説かざるや。何ぞ諸の法身の菩薩のために  
凡身を示し、この三界に現じたもうことを須いんや乃至  
一心凡に在れば、即ち修習すべし」已上。

詮ずるところ、己心と仏身と一なりと観すれば、速やかに  
仏に成るなり。故に、弘決にまた云わく「一切の諸仏、己心

ぶっしん こと

え

かん

よ

ゆえ

ほとけ

な

は仏心と異ならずと観じたもうに由るが故に、仏に成ることを得たもう」已上。これを觀心と云う。實に己心と仏心と

一心なりと悟れば、臨終を礙ぐべき惡業も有らず、生死に

留むべき妄念も有らず。「一切法は皆これ仏法なり」と知り

ぬれば、教訓すべき善知識も入るべからず。思うと思ひ、

言うと言ひ、なすとなし、儀うと儀う行住坐臥の四威儀

の所作は、皆、仏の御心と和合して一体なれば、過も無く

障りも無き自在の身と成る。これを自行と云う。

じぎい じぎょう ぎよう す あとかた あ

じぎい じぎょう みな ほとけ みこころ わごう いつたい とが な

じぎい じぎょう み な さわ な じぎい み な

じぎい じぎょう み な じぎい い さわ な じぎい み な

じぎい じぎょう み な じぎい い さわ な じぎい み な

かくの」とく自在なる自行の行を捨てて、跡形も有らず

る無明・妄想なる僻思いの心に住して三世の諸仏の教訓  
に背き奉れば、冥きより冥きに入り、永く仏法に背くこと、  
悲しむべし、悲しむべし。只今こそ打ち返し、思い直し、悟  
り返せば、即身成仏は我が身の外には無しと知りぬ。  
我が心の鏡と仏の心の鏡とは、ただ一つの鏡なり  
といえども、我らは裏に向かつて我が性の理を見ず。故に  
無明と云う。如来は面に向かつて我が性の理を見たまえ  
り。故に、明と無明とはその体ただ一つなり。鏡は一つ  
の鏡なりといえども、向かい様によつて明・昧の差別有り。

かがみ うらあ  
鏡に裏有りといえども、面の障りと成らず。ただ向かい様  
によつて得失の一一つ有り。相即融通して一法の二義なり。化  
た ほうもん かがみ うら む  
他の法門は鏡の裏に向かうがごとく、自行の觀心は鏡の  
おもて む  
面に向かうがごとし。化他の時の鏡も自行の時の鏡も、  
わ しんしょう かがみ  
我が心性の鏡はただ一つにして替わることなし。鏡を即  
しん たと おもて む  
身に譬え、面に向かうをば成仏に譬え、裏に向かうをば  
しゅじょう たと  
衆生に譬う。鏡に裏有るをば性悪を断ぜざるに譬え、裏  
む とき おもて とくな  
に向かう時、面の徳無きをば化他の功德に譬うるなり。  
しゅじょう けた くどく たと  
衆生の仮性の顯れざるに譬うるなり。

じぎょう　けた　とくしつ　りきゅう　げんぎ　いち　い　さつば  
自行と化他とは得失の力用なり。玄義の一に云わく「薩婆悉達の、祖王の弓を彎き満つるを名づけて力となし、七つの鉄鼓に中り、一つの鉄圍山を貫き、地を洞して水輪に徹るを名づけて用となすがごとし〈自行の力用なり〉。諸の方便教は、功用の微弱なること、凡夫の弓箭のごとし。何となれば、昔の縁は化他の二智を稟けて、理を照らすこと遍からず、信を生ずること深からず、疑いを除くこと尽くざざればなり〈已上、化他〉。今の縁は自行の二智を稟けて、仏の境界を極め、法界の信を起こし、円妙の道を増し、

こんぽん

わく

だん

へんにやく  
しょう

そん

しょうじん

しょうじん

根本の惑を断じ、変易の生を損ず。ただ生身および生身  
とくにん りょうしゅ ぼさつ やく ほっしん ごしん りょうしゅ ぼさつ ほっしん やく ほっしん きょうりう じぎょう じぎょう けた りきゅう しょうれつふんみよう かがみ か

得忍の両種の菩薩のみ、ともに益するのみにあらず、法身  
ほつしん ごしん りょうしゅ ぼさつ やく ほっしん やく ほっしん きょうりう じぎょう じぎょう けた りきゅう しょうれつふんみよう かがみ か

と法身の後心との両種の菩薩もまたもつてともに益す。化  
りにんぐじん りょうしゅ ぼさつ やく ほっしん やく ほっしん きょうりう じぎょう じぎょう けた りきゅう しょうれつふんみよう かがみ か

の功広大にして利潤弘深なるは、けだしこの経の力用なり  
いじょう じぎょう じぎょう けた りきゅう しょうれつふんみよう かがみ か

「已上、自行」。自行と化他との力用、勝劣分明なるこ  
もちらん よ よ み いちだいしょうぎょう かがみ か

と勿論なり。能く能くこれを見よ。一代聖教を鏡に懸け  
きょうそう

たる教相なり。

「仏の境界を極む」とは、十如是の法門なり。十界互い  
ぐそく じつかい じゅうによ いんが ごんじつ にち にきょう わ

に具足して、十界・十如の因果、権実の二智・一境は我が  
ほとけ きょうがい きわ じゅうによぜ ほうもん じつかいたが

身の中にはつて一人も漏ることなしと通達し解了し、  
仏語を悟り極むるなり。「法界の信を起こす」とは、十法界  
を体となし、十法界を心となし、十法界を形となしたま  
える本覚の如來は我が身の中に有りと信ず。「円妙の道を  
増す」とは、自行と化他との二つは相即円融の法なれば、珠  
と光と宝との三徳はただ一つの珠の徳なるがごとく、  
片時も相離れず、仏法に不足無し、一生の中に仏に成る  
べしと慶喜の念を増すなり。「根本の惑を断ず」とは、一念  
無明の眠りを覚まして本覚の寤に還れば、生死も涅槃もと

きのう ゆめ

あとかた

な

へんにやく しょう そん

そん

もに昨日の夢のゞとく跡形も無きなり。「変易の生を損ず」

どうごじ

ごくらく

ほうべんび

ごくらく

じつぼうど

ごくらく

とは、同居土の極楽と方便土の極楽と実報土の極楽との  
さんど おうじょう ひと か ど ぼさつ どう しゆぎょう ほとけ

三土に往生せる人、彼の土にて菩薩の道を修行して仏に

成らんと欲するのあいだ、因は移り果は易つて次第に進み  
のぼ こつしゅ へ じようぶつ とお いん うつ か かわ しだい すす

昇り、劫数を経て成仏の遠きを待つを変易の生死と云う

げい す

ま

へんにやく じょうい すす

じょう くのう い

なり。下位を捨つるをば死と云い、上位に進むをば生と云

へんにやく

しょうじ

じょうど

くのう

ほつけ しゆぎょう

う。かくのごとき変易の生死は、淨土の苦惱にてあるなり。

ほんぶ

われ

え ど

しょうじ

じょう くのう

ほつけ しゆぎょう

ここに凡夫の我ら、この穢土において法華を修行すれば、

じつかい ご ぐ

ほうかい いちにょ

じょうど

ぼさつ

へんにやく しょう

ぼさつ

十界互具して法界一如なれば、淨土の菩薩の変易の生は

そん ぶつどう ぎょう ま へんにやく しょうじ いつしょう なか つづ  
損じ仏道の行は増して、変易の生死を一生の中に促めて  
ぶつどう じょう ゆえ しょうじん しょうじんとくにん りょうしゅ ぼさつ  
仏道を成す。故に、生身および生身得忍の両種の菩薩、  
どう ま しょう そん ほっしん ぼさつ しょうじん す  
道を増し生を損ずるなり。「法身の菩薩」とは生身を捨て  
じっぽうど こ ごしん ぼさつ とうかく ぼさつ  
て実報土に居するなり。「後心の菩薩」とは等覚の菩薩なり。  
しゃくもん ほつしん しょうじん しょうじんとくにん ぼさつ りやく  
ただし、迹門には生身および生身得忍の菩薩を利益する  
しゃくもん かい ほんもん おさ ひと みようほう な ゆえ ぼんぶ  
なり。本門には法身と後身との菩薩を利益す。ただし、今は  
われ えど しゆぎょう ぎょうりき じょうど じゅうじ とうがく  
迹門を開し本門に摄めて一つの妙法と成す。故に、凡夫の  
ぼさつ りやく ぎょう ゆえ け くこうだい  
我らの穢土の修行の行力をもつて浄土の十地・等覚の  
ぼさつ りやく ぎょう ゆえ け けた  
菩薩を利益する行なるが故に、化の功広大なり「化他の

とくよう　りにんぐじん　じぎょう　とくよう　えんどん　ぎょうじや　じぎょう  
徳用〉。「利潤弘深」とは〈自行の徳用〉、円頓の行者は自行  
と化他と一法をも漏らさず一念に具足して、横に十方法界  
に遍するが故に弘きなり、豎には三世に亘つて法性の淵底  
を極むるが故に深きなり。この經の自行の力用かくのこと  
し。

そら　けた　しょきょう　じぎょう　ぐ  
化他の諸經は自行を具せざれば、鳥の片翼をもつては  
空を飛ばざるがごとし。故に、成仏の人も無し。今、法華經  
は自行・化他の二行を開会して不足無きが故に、鳥の二つ  
の翼をもつて飛ぶに障り無きがごとく、成仏に滯り無

し。

薬王品には十喻をもつて自行と化他との力用の勝劣を  
判ぜり。第一の譬えに云わく「諸經は諸水のごとく、法華  
は大海のごとし」云々〈取意〉。實に自行の法華經の大海に  
は化他の諸經の衆水に入るること、昼夜に絶えず入ると  
いえども増せず減せず、不可思議の徳用を顯す。諸經の衆  
水は片時のほども法華經の大海を納ることなし。自行と  
化他との勝劣かくのごとし。一つをもつて諸を例せよ。  
上來の譬喻は皆、仏の所説なり。人の語を入れず。こ

の旨を意得れば、一代聖教鏡に懸けて陰り無し。この文釈を見て誰の人が迷惑せんや。三世の諸仏の總勘文なり。

あえて人の会釈を引き入るべからず。三世の諸仏の出世の本懷なり。一切衆生成仏の直道なり。

四十二年の化他の経をもつて立つるところの宗々は、華厳・真言・達磨・淨土・法相・三論・律宗・俱舍・成実等の諸宗なり。これらは皆ことごとく法華より已前の八教の中の教えなり。皆これ方便なり。兼・但・対・帶の方便の誘引なり。三世の諸仏の説教の次第なり。この次第を糾し

ほうもん

だん

しだい

たが

ぶっぽう

て法門を談ず。もし次第に違わば、仏法にあらざるなり。

いちだいきょうしゅ

しゃかによらい

さんぜ

しょぶつ

せつきょう

しだい

ただ

一代教主の釈迦如来も、三世の諸仏の説教の次第を糾し

いちじ

たが

われ

きょう

い

て、一字も違わず我もまたかくのごととして、經に云わく

さんぜ

しょぶつ

せつぱう

ぎしき

われ

いま

「三世の諸仏の説法の儀式のごとく、我も今またかくのご

むふんべつ

せつぱう

ぎしき

いじょう

たが

なが

さんぜ

とく無分別の法を説く」已上。もしこれに違わば、永く三世

しょぶつ

ほんい

そむ

たしゅう

そし

おのおのわ

しゅう

た

の諸仏の本意に背く。他宗の祖師、各 我が宗を立てて

ほつけしゅう

あらそ

あやま

なか

あやま

まよ

なか

まよ

法華宗と諍うこと、誤りの中の誤り、迷いの中の迷いな

り。

ちようたがく

けつ

さんのういん

は

い

徵他学の決 〈山王院〉

にこれを破して云わく「およそ

はちまんほうぞう

ぎょうそう

す

しきょう

い

はじめ

しめ

八万法藏、その行相を統ぶるに、四教を出でず。頭辺に示

すがごとし。藏・通・別・円は即ち声聞・縁覚・菩薩・仏乗

なり。真言・禪門・華厳・三論・唯識・律業・成俱の二論等の

能所の教理、いかでかこの四つに過ぎん。もし過ぐと言わ

ば、あに外邪にあらずや。もし出でずと言わば、便ち他の

所期（即ち四乗の果なり）を問得せよ。しかして後に答え

に随つて極理を推ね徵めよ。我が四教の行相をもつて並

べ検えて彼の所期の果を決定せよ。もし我と違わば、隨

つて即ちこれを詰めよ。しばらく華厳の五教のごときは、

すなわ

つ

けごん

じきょう

かんが

か

しょご

か

げじや

か

わ

たが

したが

なら

したが

ごくり

たず

せ

わ

しきょう

ぎょうそう

のち

こた

なら

よ

ぜんもん

けごん

さんろん

ゆいしき

もんとく

い

た

た

したが

なら

げじや

い

た

た

したが

なら

よ

じょうもん

えんがく

ぼさつ

りつこう

じょうぐ

よつ

す

い

す

い

た

た

したが

なら

おののおの しゅいんこうかあ いつきょう  
各々に修因向果有り。初・中・後の行、一ならず。一教  
いつかまさ しょご  
一果合にこれ所期なるべし。もし藏・通・別・円の因と果と  
にあらずんば、これ仏教ならざるのみ。三種法輪、三時教  
とう なか つ さだ ふつきょう  
等、中に就いて定むべし。汝、何者をもつてか所期の乗と  
なすや。もし仏乗なりと言わば、いまだ成仏の觀行を見  
なすや。もし菩薩なりと言わば、これまた即・離の中道の異あ  
ず。もし菩薩なりと言わば、これまた即・離の中道の異あ  
ず。もし菩薩なりと言わば、これまた即・離の中道の異あ  
るなり。汝、正しくいづれを取るや。もし離の辺を取らば、  
か じょう ま い と じょうぶつ かんぎょう み  
果として成すべき無し。もし即是を要とせば、仏に例し  
か なん な と そくぜ よう ほとけ れい  
てこれを難ぜよ。謬つて真言を誦すとも三觀一心の妙趣  
なん あやま しんごん じゅ さんがんいつしん みょうしゅ

を会せんば、恐らくは別人に同じて妙理を証せじ。ゆえ  
に、他の所期の極を逐つて、理我が宗の理なりに準  
じて徵むべし。因明の道理は外道と対す。多くは小乗お  
よび別教に在り。もし法華・華嚴・涅槃等の經に望めば  
接引門なり。権に機に對して設けたり。終にはもつて引進  
するなり。邪小の徒をして会して眞理に至らしむるなり。  
ゆえに、論ずる時は、四依擊目の志を存してこれに  
執著することなかれ。また、すべからく他の義をもつて  
自義に対檢して、随つて是非を決すべし。執してこれを怨  
じぎ たいけん したが ぜひ けつ しゅう うら

むことながれ、大底、他は多く三教に在り、円旨至つて少  
なきのみ」。先徳大師の所判かくのごとし。諸宗の所立、  
鏡に懸けて陰り無し。末代の学者、何ぞ、これを見ずして、  
みだりに教門を判ぜんや。

大綱の三教を能く能く学すべし。頓と漸と円との三教  
なり。これ一代聖教の総の三諦なり。頓と漸との二つは  
四十二年の説なり。円教の一つは八箇年の説なり。合して  
五十年なり。この外に法無し。何に由つてかこれに迷わん。

衆生に有る時にはこれを三諦と云い、仏果を成する時に  
しうじよう あ とき さんたい い ぶつか じよう とき

さんじん

い

いちぶつ

いみょう

と

あらわ

はこれを三身と云う。一物の異名なり。これを説き顕すを

いちだいしようぎょう

い

かいえ

ひと

そう

さんたい

一代聖教と云う。これを開会してただ一つの総の三諦と

じょう とき じょうぶつ

かいえ い

じぎょう い

成す時に成仏す。これを開会と云い、これを自行と云う。

たしゅう

た

また他宗の立つるところの宗々は、この総の三諦を分別

やつ

た

おのおの

しゅう

た

そう さんたい

ふんべつ

して八つとなす。各々に宗を立つるによつて、円満の理を

か じょうぶつ りな

ゆえ よしゅう

じつ ほとけ

まんまん ほな

覗いて成仏の理無し。この故に余宗には実の仏無きなり。

ゆえ きら こころ

ふそく

きら

故に、これを嫌う意は、不足なりと嫌うなり。

えんぎょう と

かん

いつさいしょほう

えんゆうえんまん

じゅうごや

円教を取つて観すれば、一切諸法は円融円満して十五夜

つき

ふそくな

まんぞく

くきよう

ぜんあく

きら

の月に不足無きがごとく満足し究竟す。善惡をも嫌わず、

おりふし

えら

じょうしょ

もと

じんぴん

えら

いつさい

折節をも撰ばず、靜処をも求めず、人品をも択ばず、「一切

諸法は皆これ仏法なり」と知りぬれば、

諸法に通達す。

即

ち非道を行はずとも仏道を成するが故なり。天・地・水・火・

諸法は皆

これ五智の如來なり。

一切衆生の身心の中に住在し

て、片時も離ることなきが故に、

世間と出世と和合して

諸法に通達す。

風はこれ五智の如來なり。天・地・水・火・

諸法は皆

これ五智の如來なり。

一切衆生の身心の中に住在し

て、片時も離ることなきが故に、

世間と出世と和合して

諸法に通達す。

心中に有つて、心の外には全く別の法無きなり。故に、

諸法は皆

これ五智の如來なり。

一切衆生の身心の中に住在し

て、片時も離ることなきが故に、

世間と出世と和合して

諸法に通達す。

心の外には全く別の法無きなり。故に、

諸法は皆

これ五智の如來なり。

一切衆生の身心の中に住在し

て、片時も離ることなきが故に、

世間と出世と和合して

諸法に通達す。

諸法は皆

これ五智の如來なり。

一切衆生の身心の中に住在し

て、片時も離ることなきが故に、

世間と出世と和合して

諸法に通達す。

諸法は皆

これ五智の如來なり。

一切衆生の身心の中に住在し

て、片時も離ることなきが故に、

世間と出世と和合して

諸法に通達す。

有るによつて如意宝珠と云う。故に、総の三諦に譬う。も  
しまた珠の三徳を別々に取り放さば、何の用にも叶うべか  
らず。隔別の方便教の宗々もまたかくのごとし。珠を  
ば法身に譬え、光をば報身に譬え、宝をば応身に譬う。  
この総の三徳を分別して宗を立つるを不足と嫌うなり。こ  
れを丸じて一つとなすを総の三諦と云う。この総の三諦は  
三身即一の本覚の如來なり。

また寂光をば鏡に譬え、同居と方便と実報との三土を  
ば鏡に遷る像に譬う。四土も一土なり。三身も一仏なり。

いま

さんじん

しど

わごう

ほとけ

いったい

とく

今はこの三身と四土と和合して仏の一体の徳なるを、寂光の仏と云う。寂光の仏をもつて円教の仏となし、円教の仏をもつて寤の実仏となす。余の三土の仏は夢の中の權仏なり。これは三世の諸仏のただ同じ語に勘文し給える総の教相なれば、人の語も入らず、会釈も有らず。もしこれに違わば、三世の諸仏に背き奉る大罪人なり。天魔・外道なり。永く仏法に背くが故に。

これを秘藏して他人には見せざれ。もし秘藏せずしてみだりにこれを披露せば、仏法に証理無く、二世に冥加無か

らん。謗する人出来せば、三世の諸仏に背くが故に、二人  
ながらともに悪道に墮ちんと識るが故に、これを誠むるな  
り。能く能く秘藏して深くこの理を証し、三世の諸仏の  
御本意に相叶い、二聖・二天・十羅刹の擁護を蒙り、滯り  
無く上上品の寂光の往生を遂げ、須臾の間に九界生死  
の夢の中に還り来つて、身を十方法界の国土に遍し、心を  
一切有情の身中に入れて、内よりは勸発し外よりは引導し、  
内外相応し、因縁和合して、自在神通の慈悲の力を施し、  
広く衆生を利益すること滯り有るべからず。

三世の諸仏は、これを「一大事因縁」と思しめして、世間に出現し給えり。「一」とは、中道なり、法華なり。「大」とは、空諦なり、華嚴なり。「事」とは、假諦なり、阿含・方等・般若なり。已上、一代の総の三諦なり。これを悟り知る時仏果を成するが故に、出世の本懷、成仏の直道なり。「因」とは、一切衆生の身中に総の三諦有つて常住不変なり。これを總じて因と云うなり。「縁」とは、三因仞性はありといえども、善知識の縁に値わざれば、悟らず知らず顯れず、善知識の縁に値えば、必ず顯るるが故に、縁と云う

なり。

しかるに、今、この一と大と事と因と縁との五事和合して、  
値い難き善知識の縁に値つて五仏性を顯さんこと、何  
の滯りか有らんや。春の時來つて風雨の縁に値いぬれば、  
無心の草木も皆ことごとく萌え出でて花を生じ、敷き栄えて世に値う氣色なり。秋の時に至つて月光の縁に値いぬれば、草木皆ことごとく実成り熟して、一切の有情を養育し  
寿命を続ぎ長養し、終に成仏の徳用を顯す。これを疑い、これを信ぜざるの人有るべしや。無心の草木すら、な

じんりん

おもつてかくのどし。いかにいわんや人倫においてをや。

われ まよ ぼんぶ

我らは迷いの凡夫なりといえども、一分の心も有り解も

あ もよお

有り、善惡を分別し、折節を思い知る。しかるに、宿縁に

しよう ぶつぱうる ふ こくど う

催されて、生を仏法流布の國土に受けたり。善知識の縁に

いんが ふんべつ じょうぶつ み

値いなば因果を分別して成仏すべき身をもつて、善知識に

あ いわ そうちもく おと

値うといえども、なお草木にも劣つて、身中の三因仮性を

あらわ

顯さずして黙止せる謂れあるべきや。この度必ず必ず

しようじ ゆめ さ

生死の夢を覚まし、本覚の寤に還つて生死の縊を切るべ

し。

今より已後は、夢の中の法門を心に懸くべからざるなり。  
三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華經を修行し、障り  
無く開悟すべし。自行と化他との二教の差別は鏡に懸け  
て陰り無し。三世の諸仏の勘文かくのごとし。秘すべし、秘  
すべし。

弘安二年己卯十月 日蓮 花押